# 明石の史跡　（４５）寂蓮と明石の浦

さびしさはその色としもなかりけり真木たつ山の秋の夕暮

これは西行法師・藤原定家とともに『新古今和歌集』に収載され、広く人口に膾炙された三夕の和歌のひとつで、寂蓮法師のものである（新日本古典文学大系１１．１１７頁）。

寂蓮は、醍醐寺の阿闍梨俊海の子で、伯父藤原俊成の養子となったものの、成家・定家が生まれ成長するに及び、やがて養子を辞し、承安２年（１１７１）ごろ出家したといわれる。諸国（出雲・大和・高野・有馬の湯・芦屋など）遍歴の旅を続け、嵯峨をその住まいとする。すぐれた歌才を後鳥羽上皇に重用され、建仁元年（１２０１）７月和歌所設置とともに寄人の一員となり、同年１１月３日『新古今和歌集』の撰者六名の中に名を連ねたものの、翌２年（１２０２）７月２０日ころ死去（大日本史料４－７／国史大辞典７／日本古典文学大辞典３）。

彼は上皇（後鳥羽）のそば近く仕えるようになって、「播磨国あかしの浦のほとりに領所給て」とあって（源家長日記／大日本史料４－７．４９６頁）、明石浦の周辺に所領をもっていたことがわかる。

明石の浦の周辺とは、どのあたりをさすのだろうか。まず「浦」の立地条件を考えるに、『広辞苑』によれば、

海や湖の湾曲して陸地に入り込んだ所。「田子の―」

一般に、海辺。また、みずぎわ。「―の苫屋(ﾄﾏﾔ)」

とあって、東は舞子から、西は明石川の河口部にいたる湾曲した海辺を、明石の浦と位置づけることができる。人丸山（現在の明石城公園）や町屋の大蔵谷は対象外であろう。かつては清盛の山荘が存在した、山田川の下流域を含めた地域が、寂蓮に与えられたのではなかろうか。

**日本歴史学会会員　茨木　一成**